
ブラック・ローズ ー世界に一輪しか咲かない花ー

白崎 みらい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラック・ローズ ―世界に一輪しか咲かない花―

【Nコード】

N9393Z

【作者名】

白崎 みらい

【あらすじ】

世界で一輪しかない花「ブラック・ローズ」

人間には確認されたことのない幻の花。

現在4月。少年は外を眺めていた。すると隣から半透明の透き通った少女。

ここバスの中だよwさわがないでねwhyバスの運転手

世界の命運をかけた黒いバラ。それを中心に起こるいろんな事件。

「ブラック・ローズ」をきっかけに世界の歯車が動き始める！！

プロローグ

「ブラック・ローズ」それは世界に一輪しか咲いていないといわれる花。

人の知らない間に咲き知らない間に枯れていく。

この花は現実世界リアルワールドといわれる世界にあると言われている。

だが、人間の手に1度もわたったことがなく見つけられたこともない幻の珍しい花。

今は4月。青い空。白い雲。意外と暖かい春の陽気。

太陽の光を乱反射して海が様々に光輝いてる。

この景色を少年は眺めていた。

少年の名は倉本 俊。くらもと しゅん

黒髪の短髪で全然モテないわけでもないが人の集まるほどでもない。中学の修学旅行では知らない女子高生に、可愛いとチャホヤされたくらいだ。

地元から高校が遠かったために実の兄の家へ引越すことにした。だから、今はバスに乗り兄の家のある緑ヶ丘みどりがおかへ向かっていた。

俊の隣には自分のカバンとリュックを置いていた。それで座席は埋まっている。

俊は外を眺め続ける。

隣から声が聞こえる。

「ねえ、俊。もう少して緑ヶ丘だね。」

と、女の子の声がする。「ああ、そうだな。」と言いながら振り向く。

「おい、千里ちさとなぜいちいち座席に出たり入ったりするんだ？おとなしくしてろよ。」

と、俊は千里と呼ばれる少女へ言った。

「えゝ、いいじゃゝん。別に他の人に見えないんだから。それにこ

んなことしないと暇なんだもん。」

「はあ、待てねえのかよ。小さい時から変わらねえな。」

俊は笑いながら言った。

千里は、俊と幼なじみだ。本名は宮本^{みやもと}千里^{ちさと}。黒髪のセミロングの女の子だ。顔立ちもすつきりしている。5年前に事故にあつて俊が目覚ましてからすでに今のような半透明で透き通っていた。俊でも彼女に触れることが出来ない。

5年前の事故では千里の姉がなくなり俊の妹と千里と一人の少女が行方不明のままだ。ちなみに俊は、致命傷にも関わらず奇跡の生還をしたのだ。

「ねえ、俊。そろそろ着くよ？荷物とか忘れちゃだめだよ？」と、千里。

「ん？わかってるよそんなの。高校生にもなつて簡単に忘れるか！。」

「はあ？確認しただけじゃん！だめなの？」

「別に…。」と俊。「ほら、降りるぞ」と言つて、バスを降りた。

プロローグ（後書き）

出来るだけ多くの人に読んでもらいたいです。
感想やアドバイスがある方はドシドシお願いします

久しぶりの再会と初めての出会い

俊はバスを降りた。

バスが発車した。

「これから俺の新しい高校生活が始まるぜー
と俊は思った。

すると千里が、

「ねえ、あそこの草むらを見て」。誰かが上半身だけつつこんで何かしてる。」

「ん？どこ？」

「ほら、あそこだよ。」

と、言いながら指を指していた。俊は千里の指している方向を見た。よく見えなかった。また見てみる。今度は目を凝（こ）らして。

「ほんとだ。なにしてるんだろ？」

千里が手をおろして俊の前に来た。

「ね？いたでしょ？」

「ああ」と言いながら千里ごしに見た。

そのとき、その人が草むらの中へ入っていった。入っていったといつか落ちた。

俊は道路を横断する。千里は俊の右少し上の斜め後ろという微妙であり絶妙な位置だ。

とにかく、千里はほつといて草むらの近くまでくる。そして俊は声をかけた。

「あの」。大丈夫で うわぁ！」

驚いた声とともに草むらから何かが抱きついてきた。

「にゃん」と、ネコが鳴いた。

「え？ネ、ネコ？」と俊。すると草むらからさっきの女の子らしき人が言った。

「ん？ネコって言った？いつの間に戻ってたんだろ？逃がさないで

捕まえてくれますか？今、向かいます。」

俊は思った。「女の人だったのかと。まあ服装も白い服に黒いミニスカートだったし、そりゃ女の子だよー」

自分に少しあきれながら、女の子を待った。俊があきたときにちょうどできた。

「おまたせ。あ、うちのネコだあ。ありがとうございます。この子、この草むらにはいると出られなくなっちゃって。」

その少女は栗色のツインテールでその髪が腰より少し下までのびている。瞳が水色。体型はモデル体型で美形の女の子だ。だが、この女の子は見覚えがあった。小さい時から5年前まで俊の居た町で遊んだりしていた幼なじみと全く同じなのだ。そして思わず言葉が出てしまった。

「え？み、未来？^{みらい}」

「え、私の名前？そうだけど。なんで知ってるの？」

「えー？覚えてない？」

「んゝ初めて会った感じじゃないけど知ってる感じでもないなあ。」

「そっかゝ」

未来は5年前の事故で俊たちと一緒に乗っていた女の子だ。行方不明になった女の子は未来なのだ。

未来の本名は黒木^{くろき} 未来^{みらい}年齢は同じ15才だ。

俊は5年前の事故のことを思い出した。それをぶつけることにした。そのとき、右方向から声が聞こえた。

「おゝ、未来。今日もまた草むらに？」

女の子のようだ。俊と未来はその子の方をみる。その子は青よりの紫色の髪で左目が前髪で隠れている。髪型はポニーテールを右側にずらした斜め結いだ。

未来が刹那と言われる女の子に言った。

「ん？刹那^{せいな}だあ。おはよゝ。」

俊は答えた。「いま、昼だけど？」刹那が続ける。

「その少年の言うとおり。今はお昼よ未来。」

「あれれ？忘れてたあ。」

「相変わらずマイペースな面もあるね。」少し笑っていた。そしてこう続ける。

「それでこの少年を未来は知ってるの？」

「この少年ってちゃんと名前あるし！」

「んゝそれが久しぶりな感じがするんだけど思い出せないんだ。」

「ということは少年。君は未来が事故に遭う前の知り合いかなんかだよな？」

「え、まあそうだけどなぜそこまで推理を？」

「未来は5年前の8月に会ったの。8月3日だったかな？そのときすでに記憶を無くしていた。無くなったのは思い出の記憶みたいで知識はあるの。」

「なんか、私が能無しみたいじゃん！」

未来は少しふてくされる。

「ふふつ。まあごめんね、未来。」

「とにかく、思い出の記憶がなくなったの事実なんだろう？なら覚えてないか。」

「それで少年。君の名は？」

「あゝっと、自己紹介をしてないね。俺は俊。本名は倉本 俊。」

「了解！私は神崎 かんざき 刹那 せつな よろしくね、俊。」

「んじゃあ私もゝ。黒木 未来です。私は忘れっちゃったけど、改めてよろしくね。」

「それで、俊はこのあとどうするの？」と刹那が聞いてきた。

「俺はこの町にある兄貴の家行かないとないんだ。」すると未来が、

「じゃあさ刹那、ついていってみようよ。」

「え、だめよ。今日のさつき来たばかりなんだし俊は荷物の整理とかしてないのよ？」

「俺は、整理とかしてないけど全然大丈夫。」

「でもあんたの兄貴は良いって言うの？」

「兄貴は實際家にいないんだ。実質一人。」

「それならおじゃましようよ刹那」

「はあ、仕方ないな未来は。俊それで良い？」

「ああ、いいよ。それじゃあ行きますか。」

そして俊たちは歩きだした。

久しぶりの再会と初めての出会い（後書き）

ようやく始まりました。 やつとです。

出来はよくないと思いますが是非読んでみて下さい。
感想やアドバイス等がありましたらどしどし下さい。
お願いします

半透明少女と幼なじみ

この町は交差点が多い町だ。それに住宅街や商店街などもある。今は未来と刹那から案内を受けながら俊は町の作りを確認する。そのとき、目の前に

「しゅ〜ん。なんか女の子二人に囲まれてテンション高そうだね。」
千里がいきなり現れて言ってきた。「うわっ。びっくりした。」
と未来。

「そんなに驚くことでもないと思うけど？」と、刹那が冷静に言った。

「だって幽霊に見えたんだもの。」

「はは、ドンマイだな千里幽霊だって。」と、俊は笑いながら言った。

「なにが幽霊ですって？失礼な！」と千里。ここで刹那が俊に訪ねてくる。

「それでこの子はなんなの？」

「おっと忘れてた。紹介するよ。この子は千里。5年前の事故のあと、目を覚ましてからずっとこうやって一緒なんだ。それに、幼なじみなんだ。」

「へ〜。」と未来。「なるほど。」と刹那。二人に理解してもらったようだ。すると未来が、

「ってことは私の知り合いなのか。」

「ああ。そうだよ。」と俊は答えた。

「もしかして未来。私のこと忘れてるとか言う気でしょ！」

「はう…。」と、未来がちよっと声を出した。

「図星かあ。ちよっとそれはひどくない？ねえ、どうなの？未来！」
「はうう…。」

ちよっと未来がかわいそうなので俊が千里の話に割り込んで理由を話す。

「待て、千里！未来にも理由があんの。だよな？未来。」軽く未来にふつてみた。

「はえ？あ、は、はい。えっと、事故の前のこと覚えてなくて

。ごめんなさい。未来は軽く頭を下げた。

「え、あ、え、あ、ああそ、そうなんだ。知らなかったからさ。こっちもごめん。」

刹那が耳打ちで

「ねえ、俊。この二人なんかところどころ似てる気がするんだけど。

「だね。」と、俊は軽く笑って答えた。

ようやく家についた。兄貴の家はなんかボロいわけでもなく新しいわけでもなく……。すると刹那が

「ふう〜ん。俊の兄貴はここに住んでたんだ。」

「すごいね、俊。」

「どうかな？すごくないと思うんだけど。未来はすごいと思うんだ。」

「え、みんな思わないの？ん〜じゃあ前言撤回で。」笑いながら答えた。でも、と未来が続ける。

「ここって噂では幽霊屋敷って呼ばれてたような。だよな？

刹那？」

「わ、私にふつたな？確かにそう呼ばれてた気が。」

「そんなことないって。言い切れないけど。ま、いこっ。」

そして俊たちは俊の兄貴の家に入っていった。

半透明少女と幼なじみ（後書き）

まだ全然進みませんねwまだ戦闘シーンとかないの？ 自分に言っても意味なしよ

読んで下さった方々。それで感想を持って下さった方々。感想じやなくアドバイスを持った方々。じゃんじゃん下さいな。

よろしく願いしますm（――）m

兄の残した時の止まった家

家自体は緑ヶ丘^{みどりがおか}市の小高い丘の上にある。

家の戸を開けてみると少し広めの玄関だ。靴箱的なものはないので俊たち3人は靴を脱ぐ。俊は初めに上がる。すると二人が

「お邪魔します。」

俊は思う。一兄貴がいなくても人んちには変わりないんだっただなー
そう思いながら2・3メートル先にある扉を開けた。スライド式だ。
そのスライド式のなかはボロめのみためとはうらはらに手の込んで
いるしつかりとした木造住宅だった。すると未来が

「うわぁ、広ーい。お金持ちの別荘みたーい。」

「言えてるな。兄貴はこんなとこにいたのか。」

「それにしても広すぎても落ち着かないわ。」と刹那。そのとき、
未来はなにかを見つけたらしく歩きだした。千里が言った。

「どうしたの？未来いー。」

そして何かの前に立ち止まった未来がこう言った。

「カレンダーだ。」

「カレンダー？そう珍しいものではないわ。」

「うん、そうだけど、このカレンダー3年前のものなんだもん。」

「兄貴。ここを3年も空けてたのか。よく空き巣に入られないな（
笑）」俊は軽く笑った。

「それはそれで良いけど、ここ、すごくほこりっぽい。」

「刹那の言うとおりだね。すごくほこりっぽいな。」

「まあ仕方ないって3年も放置だから。」

俊の言葉に対し千里が言った。

「それならまず一度外にでた方がいいと思うな。」

「千里の言う通りね。いったんでましょ ックシュン。」手

で口を覆いながら刹那がくしゃみした。

「こっいうとこ苦手。早く出よ。」

「そうだな。出よう。」

こうしてみんなは家から退散する。
家を出たあと俊は言った。

「どうするかな。ほこりっぽい冷蔵庫の食べ物も無さそうだし。
今日は外食にしよう。」

「それなら私も行く。私も一人暮らしだし。」と未来。

「未来にしてはある意味初対面なのにいいの？」と刹那

「あゝ、そっか。それなら、刹那も！」未来は刹那に抱きついた。

「ちよつと未来？抱きつくな！ちょ　離しなさい！」

「刹那が行くって言うまで離さないもん。」

「ちよつとなにその取引！？ってかもう俊と一緒に行くって決まっ
てるの？私まで巻き込むな！！！」

刹那は必死に未来を離そうとする。でも、なかなか離れないので

「あーもう、いい、いいわ、いいわよ。行けばいいんでしょ？行っ

てあげるから。」その言葉に未来は嬉しそうだ。それはいいが、刹
那がかわいそうだった。

「あはは、未来も意外と強引だね。」笑いながら千里が言った。

「だな。」と、俊は言って「んじゃ行くか。」

こうして3人と1人の半透明少女はまた町に出た

兄の残した時の止まった家（後書き）

まだ、戦闘シーンが来ません。私も書くのが楽しみでたまらないのにそこまで行くのが長いですねw

本屋なので売られてるシリーズ系の小説みたいな感じw

それはそれで置いて感想やアドバイスのある方は厳しくても優しくてもいいのでどしどし下さいな。

よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9393z/>

ブラック・ローズ ー世界に一輪しか咲かない花ー

2011年12月31日17時48分発行